

「恐れることはない」

2014年08月20日

マルコによる福音書5章35節～42節。「イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人々が来て言った。『お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。』イエスはその話をそばで聞いて、『恐れることはない。ただ信じなさい』と会堂長に言われた。そして、ペトロ、ヤコブ、またヤコブの兄弟ヨハネのほかは、だれもついて来ることをお許しにならなかった。一行は会堂長の家に着いた。イエスは人々が大声で泣きわめいて騒いでいるのを見て、家の中に入り、人々に言われた。『なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ。』人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスは皆を外に出し、子供の両親と三人の弟子だけを連れて、子供のいる所へ入って行かれた。そして、子供の手を取って、『タリタ、クム』と言われた。これは、『少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい』という意味である。少女はすぐに起き上がって、歩きだした。もう十二歳になっていたからである。それを見るや、人々は驚きのあまり我を忘れた。」

イスラエルでは会堂を中心にして共同体を形成していた。会堂で安息日の礼拝が守られ、ファリサイ派の人々が指導者として、民衆の宗教教育に携わっていた。会堂長は、会堂で行われる全てを取り仕切る人物で、町長、村長のような有力者であった。会堂長ヤイロの12歳になる娘が死にそうな病にかかった。動転したヤイロは主イエスの足もとにひれ伏し、いやしを必死に懇願した。ヤイロの懇願に応じ、彼の自宅に向かった。指導を受けていたファリサイ派の宗教家たちに助けを求めず、彼らと敵対関係にあった主イエスにいやしを求めた状況に、民衆は驚き、興味津々として群がりついていった。その途中、出血の止まらない女が現れ、時間を費やした。案の定、会堂長の家から、お嬢さんは亡くなりました、先生を煩わすには及びませんという知らせが届いた。娘の死の報告を聞いて、ヤイロは絶望し、時間を取った女の出現を恨んだ。ところが、主イエスは「恐れることはない。ただ信じなさい」と娘は助かると希望を語られた。絶望の報告と希望の言葉の狭間で、ヤイロの心は揺れた。自宅に帰ってみると、人々は悲しみ、大声で泣き叫んでいた。ヤイロは絶望が事実であることを知った。主イエスは、子どもは死んでいない、眠っていると言われ、少女の手を取って「タリタ、クム（少女よ、起きなさい）」と宣言された。すると、少女は起き上がり、歩き出した。人々は、驚いて我を忘れた。仮死状態からの目覚めであると、納得できるように説明する人もいる。

この奇跡物語は娘の死からの蘇りが主題ではないだろう。ヤイロが救われたことに焦点がある。彼は、娘を失う絶望に追い込まれたが、主イエスの「恐れることはない」という言葉によって、確かな救いに与っている。私たちの現実も、もうダメだという否定的な報告を聞き続けている。それに対し、主イエスは、神はあなたを愛している、恐れるなど言われる。パウロはコリント一10章13節で「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずで、神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」と書いている。出口のない所から、神は救いの手を差し伸べてくださると信じて、肯定的に前に向かうことが、私たちに与えられた福音である。